The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

智顗における四悉檀の意

柏倉明裕

智顗は、南北朝隋代に到るまでの小乗大乗の教法、三昧法、修行法、行位説、伝訳経論などについて、自らの教学体系中に位置付けているが、四悉檀もその例外ではない。智顗の四悉檀理解について、いくつかの論文があるが、[1]この発表は違った角度からそれらの補足を試みるものである。

智顗は「問う。今、四悉檀を以て此の經（法華経）に通づるに、此の經、何らの文、四悉檀を明かすや。答う。文中處處に皆、此の意あり」（『法華玄義』大正三三、六九〇、下）と、『法華経』に四悉檀の文はなくても、文中の處々に四悉檀の意はあるとする。このようなことから智顗は種々の所で四悉檀の意を明らかにするが、四悉檀の説かれている意味について見ていきたい。

智顗は、『法華玄義』巻一の七番共解の第七会異に於いて（『法華玄義』大正三三、六八六、中～）、十項目を挙げ、その中で四悉檀と四教、三観三智三眼、五重玄義との関係について説き、『摩訶止観』では四悉檀を四随や五略と関係として説く（大正四六、五、上）。これらのことは、智顗が四悉檀を天台教学の根幹的中心思想との関わりに於いて理解していることを表している。さらに、四悉檀が三観との関係で述べられることは、四悉檀が教義のみならず、実践との関係から理解されていることを示している。

さらに、四悉檀の相が説かれている第二弁相では「一悉檀通有二四悉檀」「爲人有一四」「對治中有一四」「第一義中四」（同、六八七、中）として、これは一悉檀に四悉檀があることであり、四悉檀互具と言うことができる。四悉檀互具として一悉檀に四悉檀有りとは、一悉檀は単に一悉檀のみとしてあるのではなく他の三悉檀のはたらきを具足していることを表す。さらに、「又、通じて作さば、四悉檀不同なれども、通じて是れ世界悉檀なり。四悉遍く衆生を化するときは通じて是れ爲人なり。四悉檀皆破邪なるときは通じて是れ對治なり。一種を聞くに随いて皆能く道を悟るときは通じて是れ第一義なり」（同、下）とあり、これは、言わば通相四悉檀、総の四

印度學佛教學研究第五十八巻第一号　平成二十一年十二月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

悉檀である。通相四悉檀とは、世界悉檀であろうと、為人悉檀であろうと、一つの悉檀に徹することによって、他の悉檀も全てがその悉檀として統一され、四悉檀それぞれのはたらきを持つ違いのまま、通じて仏道となることである。一つの悉檀を究めることによって他の三悉檀の隔たりを超える、それが「通の世界悉檀」「通の為人悉檀」「通の対治悉檀」「通の第一義悉檀」であり、通相四悉檀ということである。

四悉檀互具、通相四悉檀とは、自在無礙に四悉檀の法を身に成就していることを意味し、互具として一つの悉檀に他の悉檀のはたらきが現れ、また、通相として違いを持ったままに調和を得ていることである。それは、四悉檀そのものそれ自体として、生きた教えとして自在無礙に現実となってはたらいていることである。これは、四悉檀がもはや仏の所説の教義ではなく、能説所説の思議分別を超えて、行う者が教えそのものとして不可思議絶待であることを意味する。

また、四悉檀について「言語道斷。心行處滅。雖レ不レ可レ説。有二四悉檀因縁一故。亦可レ得レ説」（『摩訶止観』大正四六、二九、中）とあるように、四悉檀はあえて説かれた因縁としてある。それは、説く者が、言語道斷心行處滅、不可思議絶待なる境地から、言葉を超えたことをあえて言葉を以て表現したということである。四悉檀は、四悉檀なる教えが我々と別に何かそういうものが対してあるのではなく、言語道斷心行處滅、不可思議絶待なる思議分別のない境地に拠っていることを意味している。

そのような言語道断、不可思議絶待に拠る四悉檀は、『法華経』で説かれる「正直捨方便」として、そのまま「妙」であるとする。「此經正直捨方便。但有二圓實四悉檀一。是故爲レ妙。（中略）若決二一一悉檀一。皆有二第一義一者。是則爲レ妙」（同、七四六、中下）とあるように、四悉檀は、『法華経』の「正直捨方便」として、但、円にして実なる四悉檀としてある故に妙とし、若し一一の悉檀を決し皆第一義悉檀あらば妙であるとする。また、「若し是れ諸権悉檀の同異を分別するに、此經の妙悉檀中に決入すれば、復た同異を見ず」（同、下）と説き、この『法華経』の妙による悉檀中に決入すれば、四悉檀それぞれの同異を見ないとする。さらに、智顗はこれによって「權を決し妙に入れば、自在無礙なり。假令、妙第一義、三を隔てず。三、一を隔てず。一三自在なり」（同、中）と説く。智顗は、四悉檀を「此經（法華経）の妙悉檀中に決入」することによって、四悉檀それぞれ自在無礙となり、第一義悉檀は三悉檀を隔てず、三は一を隔てず、一三自在なりとする。「決入妙悉檀中」ということから、『法華経』の妙に決入することによって四悉檀は互具し、通相となり、「四悉檀、是實、是妙」（同、上）となる。

この四悉檀の一つ一つが「是實、是妙」なるのは、『法華経』

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

の開麁顕妙に基づくことに依る。智顗は『法華経』と余経で説かれている四悉檀の違いについて次のように説く。「餘經亦用二四悉檀一。破三顕一破迹顕本等。而與レ此有レ異。（中略）此經用二四悉檀一巧妙」（同、七九九、下）「此經開權顕實。四悉檀大用最爲二雄猛一云云。發迹顕本四悉檀。永異二衆經一」（同、八〇〇、上）。つまり、余経が四悉檀を用いる場合は『法華経』と異なりがあり、『法華経』が四悉檀を用いる場合は巧妙で、『法華経』の開権顕実としての四悉檀の大いなる用は、最も雄猛であり、永く衆経に異なるとする。これはもはや四悉檀が『大智度論』の所説ということを超えて、『法華経』の開権顕実としての勇猛なる大いなるはたらきをもつ四悉檀として理解されている。教相において第五時醍醐味たる『法華経』は、これまで説かれた諸権の本意を開き、但、「正直捨方便但説無上道」なる真実相を顕かにする経典である。このことを踏まえて、智顗は『法華経』の妙に依る四悉檀を衆経と異なって最も雄猛とする。

また、「五品弟子假名四悉檀。六根淨相似四悉檀。初住至二等覺一分眞四悉檀。妙覺究竟四悉檀。是故稱レ妙」（同、七四六、下）と、四悉檀を六即に相当させて四悉檀の妙を説くことは、我々が妙四悉檀としての理解は段階を経て深めることによって究極に到ることの意味があるということと同時に、五品弟子仮名四悉檀であろうと、六根清浄相似四悉檀であろうと、どの過程であっても、そのまま本来的に妙であることを示している。妙悉檀における即のあり方は、一つの悉檀そのものそれ自体として不可思議絶待であることによって、それがそのままに妙なのである。どのような悉檀であっても、その悉檀に絶待不可思議であることによって、現在に究極として、過程即究竟、方法即真実実相妙なのである。これが四悉檀に六即を以てする意味ではないだろうか。

『維摩経玄疏』に於いても四悉檀が詳説されている[2]が、四悉檀と三観、四教、十二部経との関係が説かれることはあっても、これまで見てきたような四悉檀互具や通相四悉檀、六即四悉檀は説かれてはいない。これは『維摩経文疏』でも同様である。

確かに、智顗の四悉檀説は、種々なる問題を内含し、一概に捉えることのできないことがらでもある。四悉檀は、元来、一切の義を矛盾なく会通させる仏意を明らかにする教えとして、衆生を悟りに至らしめんがために説かれた手法である。浄影寺慧遠や吉蔵は「三悉檀即是世諦、第一義悉檀即是第一義諦」[3]と三悉檀と第一義悉檀との間に隔たりを設ける。特に吉蔵は『般若経』『中論』の無所得による適化無方なる四悉檀を説き[4]、一見、『法華経』の妙によっての融通無碍と似かよっているが、依り所が違っている。智顗は先に触れたように「第一義は三を隔てず。三は一を隔てず。一三自在」互具通相と

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

し、『法華経』に依って四悉檀それぞれが実にして妙であるとする。しかし、これは安易な肯定ではない。安易な肯定は能に立って見るものが自らの立場に據って観念として所を眺めることによって行われるが、智顗は能と所の待対なき絶待不可思議として、観念や思議のないことに立脚している。それは『法華経』の「正直捨方便」なる実相妙ということである。つまり、『法華経』に依って方便門が開かれ真実相が示され、能と所のなき不可思議絶待なる実相妙が顕かとなり、その妙によって、四悉檀それぞれが、常に今として、自在無礙、一三自在として勇猛にはたらく。如来の一大事因縁たる出世本懐としての妙に依るからこそ四悉檀は互具し、通相として自在である。このように、最も勇猛なる経典の『法華経』に依って「四悉檀は是れ実、是れ妙」なのである。これらのことはこれまで触れられなかった智顗の四悉檀理解の特徴であるということができる。

1　智顗の四悉檀についての主な論文について、藤井教公「天台智顗における四悉檀の意義」（『印度学仏教学研究』第四十七巻第二号）、神達知純「天台教学における四悉檀の意義」（『印度学仏教学研究』第五十七巻第一号）、及び、奥野光賢著『仏性思想の展開』第四章「吉蔵における四悉檀義」の註（三六一頁）にまとめられている。藤井論文の「仏の衆生教化としての四悉檀」ということも、神達論文の「四悉檀の意を理解していない者としての摂論学派、地論学派」ということも、智顗が『法華経』の妙に依って四悉檀を理解していたということによって、より納得できるのではないだろうか。

2　大正三八、五二〇、中～五二四、上。

3　『大乗義章』巻第二（大正四四、五〇九、下～五一〇中）。『二諦義』巻上（大正四五、八一、中下）。

4　奥野光賢著『仏性思想の展開』第四章「吉蔵における四悉檀義」（三六〇頁）。

〈キーワード〉　智顗、四悉檀、妙、実相、『法華経』

（大谷大学大学院終了）

NII-Electronic Library Service